

ケルムスコット・ハウスのワイルド

川 端 康 雄

I. モリスとワイルドの出会い

William Morris (1834-96) が家族とともにロンドン西郊HammersmithのUpper Mall 26番地の家に転居したのは1878年秋のことだった。道路を挟んで南側にテムズ河を臨む一戸建て住宅で、反対側は長い裏庭となっていた。モリスが愛したCotswoldsのKelmscott村、またそこに借りていた別荘Kelmscott Manorの名にちなんでKelmscott Houseと名付けたこの家は、モリスの終の棲家となった。1780年代に建てられたこの家は現存しており、その一部（地階と馬車小屋）はウィリアム・モリス協会の事務所兼ギャラリーとして一般公開されている。

そこから程近いRavenscourt Parkには画家のW. B. Richmond (1842-1921)の邸宅Beavor Lodgeがあった。近所のよしみもあり、モリスはリッチモンドと親しく付き合った。そしてこのリッチモンドはワイルドとも親交があった。じっさい、モリスとワイルドとの初めての出会いはリッチモンド邸においてであったと推測される。

ワイルドとモリスの関係についての同時代人の証言は、面白いが信憑性に欠けるというものがいくつかある。その最たるものがリッチモンド邸でのエピソードであろう。画家の息子のArthur Richmondの回想録にそれは出てくる。

Moris must have been sensitive to public opinion, at least where his poetry was concerned. One day at a party in our garden my father was talking to Oscar Wilde when Morris came up to them boiling with indignation. He had just published a book of verse. "The press deliberately ignores me," he angrily exclaimed. "There's a conspiracy of silence about my book." Quickly came the retort from Oscar Wilde:

“Why not join it, Morris.” (Richmond 22-23.)

面白いエピソードではあるが、この対話部分に関しては真偽の程は怪しい。Karl Becksonの *Oscar Wilde Encyclopedia* もモリスの項目でまずこのエピソードを引いているが、ワイルドが20歳年長で長年敬愛してきたモリスに発する言葉としてふさわしくないと述べている(220)。Philip Hendersonはアーサー・リッチモンドが別のモリス(詩人 Sir Lewis Morris)と混同してしまっている可能性も示唆している(228)。

それでも、リッチモンド邸でモリスとワイルドが初めて会って言葉を交わしたのは確実と思われる。妻 Jane に宛てた手紙でモリスがそのことにふれているからだ。1881年3月下旬のことである。

Did the babes [Morris's two daughters] tell you how I met Oscar Wilde at the Richmond's? I must admit that as the devil is painted blacker than he is, so it fares with O. W. Not but what he is an ass: but he certainly is clever too. (Morris, *Collected Letters*, II, 38.)

これはモリスによるワイルドについての微妙な人物評価だと言える。上記の出会いがあった1881年はワイルドが詩集 (*Poems*) を刊行した年であり、その唯美主義スタイルの誇示を揶揄した Gilbert と Sullivan の喜歌劇 *Patience* の初演があった年である。彼が社交界でどれほど目立つ存在であったかは、William Powell Frith の絵画 *A Private View at the Royal Academy, 1881* (1883年) で確認できる。そうした評判(というか悪評)を聞いていたモリスが、じっさいに会ってみると、軽薄なところも見受けられるにせよ、世評ほどのことはなく、機知に富んでいるという印象を受けたのだった。

その1881年の詩集に入っている “The Garden of Eros” (1881) をはじめ、折あるごとにワイルドはモリスを賛美している。ホメロス『オデュッセイア』のモリスによる韻文訳について、オフィシャルなモリス伝の著者である J. W. Mackail (1859-1945) などは、西洋古典学が専門であったため、モリスの英語韻文訳の評価に一定の留保をつけているのだが (Mackail, ii, 180-183)、それに対してワイルドの書評はモリスの訳文を全面肯定して称えている (Wilde, *The Artist as Critic* 73-79)。
その書評は *Pall Mall Gazette* 紙の1887年4月26日号に無記名の記事として掲載された。おそらくモリスはこれがワイルドによる書評であることを知り、感謝の念を

抱いたことであろう。

さらに、ワイルドの批評エッセイ中でも白眉と言える “Decay of Lying” のなかに以下のくだりが見られる。

Vivian. But Nature is so uncomfortable. Grass is hard and lumpy and damp, and full of dreadful black insects. Why, even Morris' poorest workmen could make you a more comfortable seat than the whole of Nature can. Nature pales before the furniture of “the street which from Oxford has borrowed its name,” as the poet you love so much once vilely phrased it. (Wilde, *The Artist as Critic* 291.)

ロンドンのオクスフォード通り449番地にあったモリス商会のショールームに言及して、ワイルドによるリアリズム批判・ロマンス擁護の文学批評のエッセイにおける論点補強としつつ、モリスへの賛辞としている。これに限らず、ワイルドはほかでもモリスへの賛辞を繰り返している

II. ショーの証言の信憑性

では、モリスのワイルド観はどうだったのであろうか。先に引いたモリスの手紙からは、実際に会ってみてワイルドとの対話をかなり楽しんだことがうかがわれた。その点を強調したものの、信憑性が疑われているのが、George Bernard Shaw (1856-1950) による “I understood why Morris, when he was dying slowly, enjoyed a visit from Wilde more than from anybody else” という証言である (Shaw 13)。

ショーの証言が疑われる一番の理由は、“when he was dying slowly” という記述のためである。モリスが目に見えて「死に向かっていた」と言えるほど体調が悪化したのは1896年に入ってからであり(モリスは1896年10月3日にケルムスコット・ハウスで死去)、ワイルドは95年の5月から2年間獄中にいたわけなので、これではつじつまが合わないというわけである。だがショーは「レディング監獄など想像もできなかった以前にモリスの体調は悪化していた」のだとピアースンに説明している (qtd. in Henderson 150)。確かに1891年春、ケルムスコット・プレス最初の刊本を出したあたりからモリスは病気がちになっていて、体力の衰えは目に見えていた。じっさい、E. P. Thompson は、1891年春の体調悪化について “His illness was more grave than has generally been realized, and it may have represented the first onset of the diabetic condition from which he died” (581) と指摘している。そうだとすれば、1891年春以降、95年春の「ワイルド裁判」までの4年間を指し

て、モリスがワイルドの訪問を他の誰よりも楽しみにしていたというショーの証言は成立することになる。

モリスのほうからワイルドに本の献呈もしている。敬愛する物語作者＝デザイナーからのプレゼントに感激したのであろう。その礼状（1891年の3月もしくは4月の手紙）でもモリスへの賛辞が、大げさすぎるくらいに書かれている（Wilde, *Complete Letters* 476.）。そこでは、本の装丁が内容に見合っていないお粗末なものであるという批評を加え、その注文をさらにモリスへの賛辞にしている修辭が巧みである。

Ⅲ. ケルムスコット・ハウスの馬車小屋

さて、モリス伝の著者ヘンダーソンは、さきほどのショーの回想を引いた上で、「これ以外にはワイルドがハマスミス「のモリス宅」を訪れたという言及はどこにも見られない」と述べている（Henderson 349）。しかし私の知る限り、ひとつ有力な証言がある。それに入る前にケルムスコット・ハウスの「集会場」の説明をしておく。

そこには家の正面から見て左手に小さな付属の建物がある。もともとは馬車小屋（Coach House）として作られていたものだが、モリスはこれを別の用途に用いた。すなわち、入居早々は絨毯織機を設置して一種の工房として、モリス自身が長時間かけて絨毯織の練習に打ち込んだ。そして1880年代に次第に社会主義運動に精力を傾けていくと、ここに座席を備え付けて講堂に改装し、定期的に講演会を行った。特にThe Socialist Leagueがアナキスト過激派の勢力が多数派を占めるようになったためにこの組織と袂を分かち、The Hammersmith Socialist Societyを結成した1890年11月以降は、この自宅講堂がモリスの政治活動の実質上の本拠地となったのである。

前述のバーナード・ショー、H. M. Hyndman (1842-1921), Keir Hardie (1856-1915), Sidney Webb (1859-1947), Kropotkin (1842-1921), Stepnyak (1851-1895) らがここで講演を行っているが、誰よりも多く演壇に立ったのはモリス自身だった（Thompson 586）。聴衆のなかには若き W. B. Yeats (1865-1939) や H. G. Wells (1866-1946) もいた。1回で50人程度は集まったとされる。そしてそのなかに（少なくとも一度は）ワイルドも含まれていたことが、カナダの女性作家 Georgina Sime (1868-1958) の回想によって確認できる。

サイムはスコットランド生まれ、両親とも作家で、1879年、11歳で家族とともにロンドン、ハマスミスのモリス宅のあるアッパー・マルに程近い Chiswick に

移り住んだ。1907年にカナダに移住。1919年に刊行した短編小説集 *Sister Woman* は都会の貧困層の女性を描き、カナダにおけるフェミニズム文学の先駆的な作品として評価されている（Campbell）。晩年、1950年頃英国に戻った際に、自身の少女時代、つまり1880年代から90年代にかけて出会ったモリス、イエイツ、George Meredith (1828-1909), Henry James (1843-1916) といった文人についての回想録 *Brave Spirits* を1952年に私家版で出している（Frank Nicholson との共著となっている）。そのなかのモリスを回想した章のなかにケルムスコット・ハウスでワイルドを見たという証言が出てくる。

Oscar Wilde was there [the lecture room of Kelmscott House] too on that evening, and if a discussion had arisen as to whether a complete unlikeness can exist between two human beings of the same race, Shaw and Wilde might have been taken as illustrations of such a possibility. Shaw, standing there in the crowd and making one of them, yet looked as if he were alone, surrounded by nothing but space. He seemed a bit of pure Calvinism, a chapter of the "Institutes" come to life and ready to deliver its message to us. Oscar Wilde was equally distinctive in his own way, but that way was so inherently different from Shaw's that the epithet "human" seemed hardly applicable to both. The comparison I am about to make is, I know, an absurd one, but what Oscar Wilde reminded me of on that night was a basket of fruit, ripe and enticing, bulging over the basket-edge and dropping some of its juices on to the floor. He was wearing in his buttonhole, if I may trust the picture that my mind's eye gives me, a very large dahlia, crimson and beautiful in its amplitude but not what one would expect to find on a man's coat. Shaw simply couldn't have worn it; if he had put it in his buttonhole it would have died a natural death in self-defence. (Sime and Nicholson 14; 下線は引用者)

サイムの回想によれば、ワイルドやショーに加えて、ケルムスコット・ハウスでのこのモリスの講演会には Walter Crane (1845-1915) や亡命ロシア人のステプニャークが混じっていた。サイムの上記の回想ではワイルドを熟し切った「フルーツの籠」に喩える描写、そして上着のボタンホールに深紅色のダリアをつけた姿が印象的である。このときのモリスの演題が何だったか、またその日時もサイムは記録していない。モリスが定期的に講演会を行っていた期間と居合わせた顔ぶれ、そしてサイムがモリス宅を訪れていたと思われる時期などから推測して、こ

のエピソードは1890年代初頭のことであったかと思われる。

IV. 拠点としてのケルムスコット・ハウス

前節で見たように、1880年代から90年代にかけて、ケルムスコット・ハウスは、その一部を集会場に変えたことにより、イギリス社会主義運動の重要な活動拠点となっていた。モリスは1891年に社会主義同盟ハマスミス支部を独立させてハマスミス社会主義同盟として再組織化し、ショーやハインドマンらに働きかけて、セクト争いを超克して大同団結を図る中心的人物となっていた。ケルムスコット・ハウスは、そうした議論をする場として使われた。

さらにまた、この家でモリスは絨毯織やタペストリー織に打ち込み、またモリスの活字の冒険であるケルムスコット・プレスは、ここで企画を練り、このアッパー・マルの地で実行に移していった。1888年にThe Arts and Crafts Exhibition Societyが主催した第一回アーツ・アンド・クラフツ展におけるEmery Walker (1851-1933)の講演“Letterpress Printing and Illustration”についてワイルドは*Pall Mall Gazette*紙の1888年11月16日に無署名の記事を出している。この講演は「近代印刷史の転換点を示すもの」(ピータースン411)としてたいへん重要なものだったと評価される。というのは、この講演こそがモリスにケルムスコット・プレス創設に向けて背中を押したからである。アーツ・アンド・クラフツ運動史上もきわめて重要とされるその現場にもワイルドは居合わせていたことになる。

ケルムスコット・プレスとの関連で附言すると、その19冊目の刊本はWilhelm Meinhold (1797-1851)の*Sidonia the Sorceress*であった。これはワイルドの母親が英訳を手がけて1849年に刊行したもので、若きモリスとその仲間たちが愛好した作品だった。ケルムスコット・プレス版での復刻の許可を取るのにモリスはワイルドに仲介を頼んでいる (Morris to Wilde, January 5, 1893. Morris, *Collected Letters*, IV, 4-5)。

ケルムスコット・ハウスのあるハマスミス、アッパー・マルの周辺にアーティスト、デザイナー、アーツ・アンド・クラフツ運動の関係者が集まったのは、モリスのもつ磁力であったといえる。かくして、ケルムスコット・ハウスは政治と芸術双方の革新運動(モリスにしてみれば総合的な運動)の一大拠点となっていたということが言える。そしてその運動にワイルドも一枚加わっていたと見ることができる。

日本における昭和後期のモリス研究の第一人者である小野二郎は、中野好夫によるワイルドの過小評価に反論して“The Soul of Man Under Socialism”を擁護する

論陣を張った。小野は次のように書いている。

このエッセイ (“The Soul of Man Under Socialism”) をワイルドが発表したのは、一八九一年、ワイルド得意の時代であった。一八八〇年代から始まったイギリス社会主義復興は、九〇年代に入ってますます強まっていたから、知識人一般はこのワイルドの「社会主義宣言」にさしたる驚きを示したわけではなかったが、社交界でブリアント・トーカーとしてのワイルドを享受していた貴婦人連にとっては当然スキャンダルであった。むろんワイルドはこれを狙っていたわけだが、この狙いの重層性、かなりの厚味のある重層性に気づく必要がある。

いわゆる審美主義運動の隣りには、アーツ・アンド・クラフツ・ムーヴメントがあった。様々な社会主義運動があった。そのすべてが交錯するとともにウィリアム・モリスという大きな存在がいた。人が思う以上に、ワイルドはモリスの徒である。モリスの一部をラジカルに押しつめ、個人プレイにしてしまったところがあるが、しかし異端の芸術家の奇矯で幼稚な思想などではない。ウォルター・クレインといったようなイラストレーター、シドニ・コッカレルのような印刷者、ノーマン・ショウのような建築家と同時代人であるのみならず、それらの芸術思想の中心部分の微妙な表現者であった。クロボトキンの影響? クロボトキンにワイルドが会ったのは、モリスの紹介でであった。クロボトキンのアナキズムと芸術至上主義の野合などという話は、モリスとクロボトキンの思想的関係をじっくり見てからでも遅くはあるまい。しかし、ワイルドの「批評家としての芸術家」The Artist as Critic などや「獄中記」として知られるDe Profundisなどが「社会主義下の人間の魂」解説に直接関係するし、ワイルドの作品そのものにも、もっとついて読んで見たいと思う。そしてまた、ワイルド自身の上記芸術運動総体への批評——これこそワイルド批評文学の精髄だが——も読まねばならぬ。(小野 30)

小野のこのエッセイは、唯美主義運動、アーツ・アンド・クラフツ運動、またそれらと次元が異なると見なされがちな社会主義運動、それらのすべてが交錯する地点にモリスがいたこと、そしてワイルドがその流れに沿って芸術家=批評家としての活動を行ったことを論証した貴重な論考である。そのことを確認したうえで、私はさらに、ワイルドの批評がモリスに創作活動に弾みを与えたという面も

あったのではないかということを指摘しておきたい。

1880年代後半からモリスはいわゆる散文ロマンス作品を死の床に至るまで続々と書き綴っていった。先ほど少しふれたワイルドの批評“Decay of Lying”でのリアリズム文学批判——lyingすなわち虚構化能力を喪失した文学形式に否を唱え、その力の回復を図る、つまりはロマンスの復権の主張——はモリスには十分すぎるほど理解できたはずで、ワイルドが批評で展開したポイントを、モリスはロマンス創作において実践していたと言える。文学批評＝創作においてもモリスとワイルドは歩調を合わせている。そのように見ると、バーナード・ショーの前述の回想は概して疑わしいとされてきたものの、モリスがその晩年に「ほかの誰よりもワイルドの訪問を楽しんだ」という言葉に、いくばくかの真実が含まれていると見るのが確かにできるのである。

[注記] 本稿は、口頭発表ののち改稿のうえ日本女子大学文学部英文学科の紀要である『英文学研究』（第47号、2012年3月）に発表し、さらに拙著『葉蘭をめぐる冒険——イギリス文化・文学論』（みすず書房、2013年）に収録したことをお断りしておく。

引用文献

- Beckson, Karl. *Oscar Wilde Encyclopedia*. With a Foreword by Merlin Holland. New York: AMS P, 1998.
- Campbell, Sandra. “Introduction: Biocritical Context for J. G. Sime and *Sister Woman*.” J. G. Sime. *Sister Woman*. Ed. Sandra Campbell. Ottawa: Tecumseh P, 2004. 207-226.
- Faulkner, Peter. “William Morris and Oscar Wilde.” *Journal of William Morris Studies* 14.4 (Summer 2002): 14-24.
- Henderson, Philip. *William Morris: His Life, Work and Friends*. London: Thames and Hudson, 1977. [フィリップ・ヘンダーソン『ウィリアム・モリス伝』川端康雄他訳、晶文社、1991年]
- Mackail, J. W. *The Life of William Morris*. 2 vols. London, 1899.
- Morris, William. *The Collected Letters of William Morris*. Ed. Norman Kelvin 4 vols. Princeton: Princeton UP, 1984-96.
- Peterson, William S. *The Kelmscott Press: A History of William Morris's Typographical Adventure*. Oxford: Oxford UP, 1991. [ウィリアム・S・ピーターソン『ケルムスコット・プレス——ウィリアム・モリスの印刷工房』湊典子、平凡社、1994年。]
- Richmond, Sir Arthur. *Twenty-Six Years 1879-1905*. London: Geoffrey Bles, 1961.
- Shaw, Bernard. “My Memories of Oscar Wilde.” Frank Harris. *Oscar Wilde: His Life and*

- Confessions*. 1918. Two Volumes in One. New York: Horizon P, 1974. 1-32.
- Sime, Georgina, and Frank Nicholson. *Brave Spirits*. London: Priv. Print. [1952].
- Thompson, E. P. *William Morris: Romantic to Revolutionary*. 1955. London: Pantheon, 1976.
- Wilde Oscar. *The Artist as Critic: Critical Writings of Oscar Wilde*. Ed. Richard Ellmann. Chicago: U of Chicago P, 1982.
- . *The Complete Letters of Oscar Wilde*. Ed. Merlin Holland and Rupert Hart-Davis. London: Fourth Estate, 2000.
- . *The Letters of Oscar Wilde*. Ed. Rupert Hart-Davis. New York: Harcourt, Brace, 1962.
- . “Mr William Morris's Last Book.” *Pall Mall Gazette* 2 March 1889.
- 小野二郎「白熱せる魂と犯罪への共感——ワイルドと社会主義下の人間の魂」『自由時間』創刊号、1975年11月、土曜美術社、23-30頁。